

ドンドン焼きにコロナの収束を願う

栃木県立博物館 人文課長 篠崎 茂雄



ドンドン焼きの様子

ドンドン焼き(ドンド焼きともいう)は、1月中旬頃に行う火祭りである。全国各地で広く見られる。竹や藁で円錐形もしくは立方体の小屋を作り、持ち寄った門松や注連飾りなどの縁起物と一緒に燃やす行事で、この火に当たると病気になる、団子を焼いて食べると風邪を引かないなどと言われる。今から五十年ほど前になるが、筆者の住んでいた宇都宮市鶴田町でも子供会の行事としてドンドン焼きが行われていた。寒空に赤々と燃える炎はとても暖かく、団子を炙って食べたこと

は、今でもよく覚えている。その後ドンドン焼きが行われた広場は宅地となり、いつしか行事はなくなってしまうが。

ドンドン焼きは主に関東地方で見られる呼称である。竹の弾ける時に出る「ドーン」という音、あるいは「尊い」を意味する「トンド」が語源と考えられているが、かつてはトリヤキ、そして作り物の小屋をトリゴヤと呼んでいた。また、ハーホイ、ドウロクジン、サイノカミと呼ぶ地域もある。このうちハーホイは害鳥を追い払う時の掛け声、ドウロクジンやサイノカ

ミは、集落の境にあつて悪疫などの侵入を防ぐ神をいう。そして、トリヤキやトリゴヤも意味深長な呼び名である。こうしたことから、ドンドン焼きは、神聖な火の力で、田畑に害をなす鳥や悪疫の退散を願う行事といえる。

ところで、ドンドン焼きの主役は子どもである。かつて、小屋の骨組みとなる孟宗竹の収集や松飾りの回収、小屋の組み立てといった一連の準備は、子どもだけで

行った。その際に少しでも大きな小屋になるように材料集めに奔走し、周りの集落と競い合った。完成した小屋には、火鉢を持ち込み、餅を焼いたり、甘酒や雑煮を作ったりして、火をつけるまでの時間を楽しんだ。夜通し騒いでも怒られることなく、年玉や菓子ももらえたので、子どもたちは、この日が来るのを楽しみにしていた。

本来、ドンドン焼きは小正月に行われる行事である。小正月は、1月15日を中心とする3日間のことを指し、旧暦では1年で最初の満月の日にあたる。明治時代になって暦が旧暦から新暦へと切り替わり(旧暦の小正月は新暦の2月下旬から3月上旬にあたり、令和3年は2月26日である)、2000年にはハッピーマンデー制度によって、小正月を意図して制定された成人の日が1月の第2月曜日となった。多くの行事が週末に移されるなか、ドンドン焼きも14日や15日に実施することへのこだわりはなくなった。その結果、「1月の第2土曜日の行事」と思う人も少なくないようだ。

ドンドン焼きは、草木が芽吹き始める1年で最初の満月の夜に、五穀豊穡や悪疫退散を願って行う火祭りである。現在となつては、元に戻すことはできないが、ドンドン焼きの意味は心の中にとどめておきたいものである。